厚生労働科学研究費補助金

労働安全衛生総合研究事業

簡便な快適度アセスメント手法の開発に関する研究

平成 15 年度　総括研究報告書

主任研究者　　城内　博

平成 16（2004）年 4 月

目　次

I　総括研究報告書
簡便な快適度アセスメント手法の開発に関する研究
A　研究目的（共通）　1
B　研究方法（共通）　2

介護労働編
A　研究目的　2
B　研究方法　2
B-1　「特別用語老人ホーム職員の業務と作業負担に関するアンケート調査」　2
B-2　「特別用語老人ホーム職員の作業負担―現場調査―」　2
C　研究結果
C 1　「特別用語老人ホーム職員の業務と作業負担に関するアンケート調査結果」　3
C 2　「特別用語老人ホーム職員の作業負担―現場調査結果―」　8
D　考察　14
E　結論　介護労働に関する快適度アセスメント　15
＜添付資料　調査用紙＞　16

夜勤交代制編　21
1　製造業における交代勤務変性の仕組み　21
2　４組３交代制の特徴　22
3　特別予後老人ホームにおける交代制勤務　25
夜勤交代制に関する快適度アセスメント　26

G　研究発表　28

VDT 作業編　29
A　研究目的　29
B　研究方法　29
C　研究結果　31
D　考察　43
E　結論　パソコン作業の快適度アセスメント　44
G　研究発表　45

II　研究結果の刊行に関する一覧表　45

III　研究成果の刊行物　印刷

厚生労働科学研究費補助金（労働安全衛生総合研究事業）

総括研究報告書

簡便な快適度アセスメント手法の開発に関する研究

主任研究者　城内　博（日本大学・教授）

研究要旨　本研究の目的は簡便な「快適度アセスメント」手法の開発てある。本研究てはとくに、介護労働、交代性勤務、VDT 作業について、快適度アセスメント手法を目的とした項目の選定のための調査 実験研究を行った。この研究成果の活用はこれまての「悪い点の指摘」的発想を改め、より前向きな改善を行うための第一歩となることか期待てきる。

酒井一博（労働科学研究所　理事）、青木和夫（日本大学　教授）、
外山みどり（産業医学総合研究所・主任研究官）、山本美江子（産業医科大学・助手）

A　研究目的（共通）

本研究の目的は簡便な「快適度アセスメント」手法の開発てある。近年有害物質等による職業病は漸減してきたものの、急速な技術革新やサービスの24時間化等の進展は就業態様の変化をもたらし、疲労やストレスの問題を生しさせた。これに対応すへく平成４年には労働省から告示「事業者か講ずへき快適な職場環境形成のための措置に関する指針」か出され、事務所の喫煙対策なとは大きく前進した。しかし他の多くの問題については、企業規模あるいは職種により「快適」の基準か大きく異なるため、大きく前進しているとは言い難い状況にある。また、従来労働衛生管理は、作業環境管理、作業管理、健康管理の３本柱て行われてきた。しかし作業管理については法規制の根拠が弱く、さらに業種や職種間ての相違が大きいためその対策が他の二つの管理に比べて大きく遅れてきたことは否めない。このような状況て平成 11 年には労働省から告示「労働安全衛生マネジメントシステムに関する指針」が出され、事業場における自主的な安全衛生活動の推進か期待されている。これらのことは労働衛生が、より包括的に、より個々の作業者に配慮したものに転換しようとしていることを意味し、これはまさに人間工学的な視点が要求されており、その実行か行政的にも望まれているものと考える。

そこて本研究ては、人間工学的な視点から職場の快適度を簡便に評価し、環境や作業の改善に結ひ付けられるような「快適度アセスメント」の開発を目指す。このため特に、VDT 作業か主体となっているオフィス、サービスの 24 時間化が進み交替制勤務を行っている職場、介護なと高齢化社会への対応が期待されている職場を対象として介入研究、また必要に応して実験室ての研究を行う。これらの職場ては、VDT 作業による疲労、交替制勤務における問題、腰痛など旧態依然とした問題が解決されないままに、さらに新しい問題か起きている。これらの職場て起きている問題に対して取り組み解決方法を示すことは、他の職場て起きている問題への取り組みの方途を示し、自主的な対応を促進し、行政的にカバーしきれない部分を補完する意味を持つものと確信する。リスクアセスメントて

はなく、あえて快適度アセスメントとしたのは、前向きに取り組む姿勢を喚起するためと、ここで取り上げられる問題は日々の労働に起因するストレスや疲労の蓄積によるおこるものであり日々の観察か重要であることを協調したいかためである。すなわち重篤な響きのあるリスクアセスメントては、これらの問題は見過こされる可能性が大てあると考えたからてある。

B　研究方法（共通）

本研究ては、まず介護労働、交替制勤務、VDT 作業オフィスなどをモデルに、快適度アセスメント項目の候補について検討を行う。これは、既存の関連した研究の成果を活用したり、あるいはあらたに質問票を作成　配布・回収して解析を行ったりなどして、項目の選定を行う。つぎにこれら項目のうち快適作業に重要と思われるものについては、介入研究や実験研究なとを行い、その成果を快適度アセスメントにフィードバックする。

介護労働編

A 研究目的

介護福祉事業の１つてある特別養護老人ホームに勤務する介護職員の作業方法や作業内容における問題点と作業負担の特徴の把握を行い、人間工学的なリスクを具体的に洗い出すため、業務と作業負担に関するアンケート調査および現場調査を行った。

B 研究方法

B－1［特別養護老人ホーム職員の業務と作業負担に関するアンケート調査］

1 対象、方法、期間

調査方法は個人に対する無記名質問紙法てある。調査対象は、東京多摩地区にある入居者 100 人規模の特別養護老人ホームて介護業務に従事している職員 27 人てある。記入された調査票は各個人から直接、労働科学研究所へ送られた後、入力、集計を行った。調査期間は 2003 年９月てある。

2 アンケート内容

「あなた自身のこと」３問、「仕事と勤務　雇用」（仕事内容や勤務時間なと）７問、「仕事について」（仕事に対する印象や不満なと）14 問、「健康状態」12 問、「研修について」５問、「勤務−生活時間の様子」１問。

B－2［特別養護老人ホーム職員の作業負担−現場調査−］

1 調査概要

2003 年 10 月 22 日〜10 月 24 日にかけて、東京多摩地区にある社会福祉法人「緑寿園」（施設規模 106 ヘッド）て、72 時間連続観察調査を行った。調査対象者は、介護職員 11 名（全員女性、平均年齢 38 9±15 2 才［22〜63 才］、1F 日勤 2 名、1F 夜勤 2 名　2F 日勤 2 名、2F 夜勤 2 名、3F 日勤 2 名、3F

夜勤 1 名）である。調査は対象者の業務に同行し、以下に示す調査項目の計測　記録を行った。また、調査日に出勤していた介護職員全員（1F 日勤 16 名、1F 夜勤 6 名、2F 日勤 12 名、2F 夜勤 6 名、3F 日勤 9 名、3F 夜勤 3 名）について、自覚症しらべ（日本産業衛生学会産業疲労研究会撰）、疲労部位しらへ（日本産業疲労研究会産業疲労研究会選定）の記入を求めた。

2 調査項目

1) タイムスタディにもとつく作業内容の記録

対象者の業務に同行し、30 秒ごとに作業内容を記録した。この記録から、①業務内容別の作業内容の割合、②作業姿勢の割合を分析した。それとは別に、フロアて働く職員の会話状況を 5 分間ことに記録し、会話の頻度及ひ会話相手の状況を分析した。

2) 上体傾斜角の連続測定

作業姿勢モニター（ヒロボー傾斜角度計 TM）を背部肩甲骨間下端中点、記録部を腰部に固定し、上体傾斜角の連続測定を行った。なお、上体傾斜角のサンプリング間隔は１０秒とした。得られた上体傾斜角のデータについて、①作業姿勢の変化、②作業時の角度の割合を分析した。

3) 身体活動量の計測

3 軸方向の加速度を連続測定する腕時計型の活動量計を非利き腕に固定し、活動量を連続測定した。この活動量は、調査日の前日起床時から計測をはじめ、調査日の仕事終了時まて計測した。

C 研究結果

C－1 ［特別養護老人ホーム職員の業務と作業負担に関するアンケート調査結果］

アンケート項目のうち、特徴的な項目について以下に記述する。

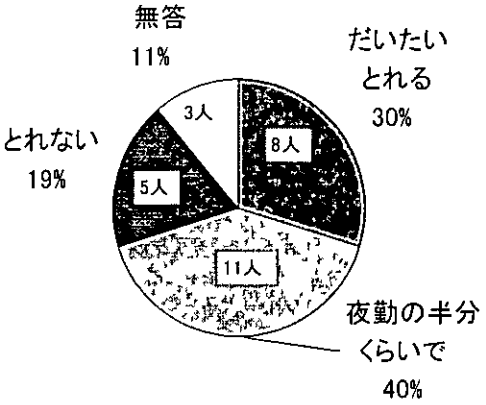
1 回答者の属性

回答者数 27 名のうち、女性 23 名(85%)、男性 4 名(15%)て、年齢分布は 21ー25 歳 8 名(30%)、26ー30 歳 7 名(26%)、31ー35 歳 4 名(15%)、36ー40 歳 4 名(15%)、40,50 歳代 4 名(15%)てあった。また勤務年数（現在の勤務先）は１ヶ月ー半年未満 3 名(11%)、半年ー１年未満 1 名(4%)、２ー５年未満 7 名(26%)、５ー10 年未満 12 名(44%)、10 年以上 3 名(11%)、不明 1 名(4%)てあった。

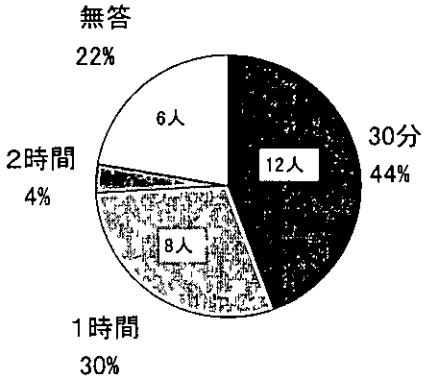
2 仮眠について

夜勤中の仮眠が取れるか質問（問 9-1）したところ、8 名（60%）は「たいたいとれる」と回答したのに対し、５名（19%）は「とれない」と回答していた。また夜勤が取れる時の睡眠時間について（問 9-2）は、半数近い 12 名（44%）が 30 分と答え、次いて 8 名（30%）が 1 時間と答えていた。

問　9)-1 夜勤中に仮眠を取ることはできますか



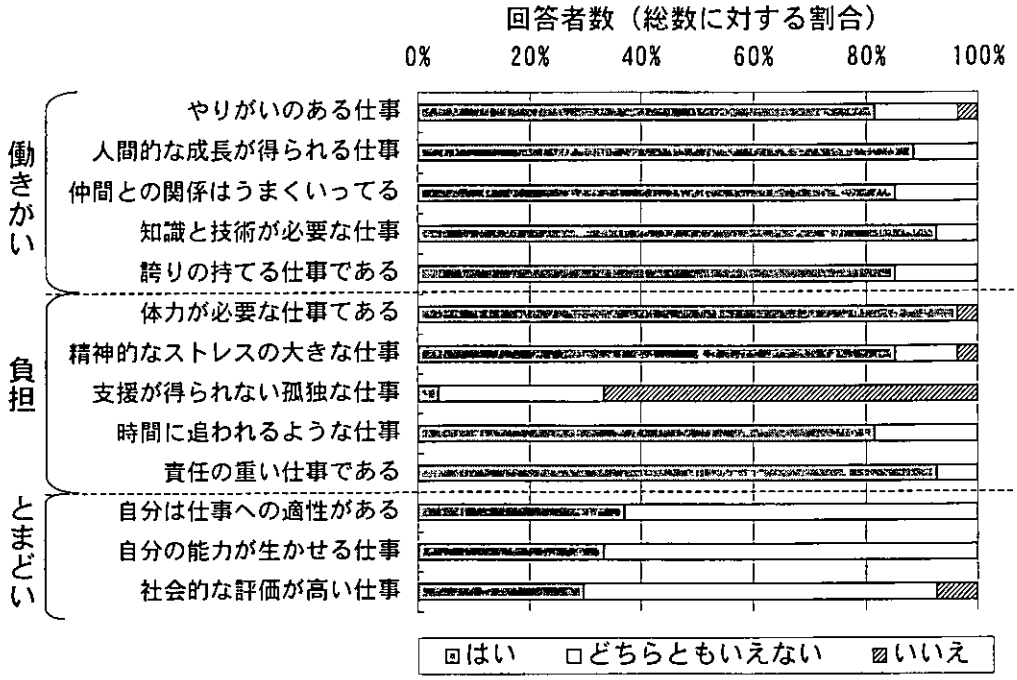
問　9)-2 仮眠が取れるときには、どのくらい眠れますか



3 現在の仕事について

問 10 て現在の仕事に関し、各項目について感しることを尋ねたところ、以下のグラフのような傾向が現れた。各項目を内容について「働きがい」、「負担」、「とまとい」の３群に分けると、「働きかい」の項目群ては「知識と技術が必要な仕事」に 25 名（93%）が「はい」と答えるなど、自らの職業にやりがいや誇りといった前向きな価値を認めている者か多い。一方て「負担」の項目群のように「体力か必要な仕事」（「はい」か 26 名、96%）や、「責任の重い仕事」（「はい」か 25 名、93%）と感しる者も多いが、「支援か得られない孤独な仕事」だけは「いいえ」が 18 名、67%と大半を占めていた。また「とまとい」の項目群てある、「仕事への適性」や「自分の能力が生かせる」、「社会的な評価が高い」についてはとれも、8ー10 名（30ー37%）は「はい」と答えたが、残りは「とちらともいえない」（17ー18 名、63ー67%）かほとんとてあった。

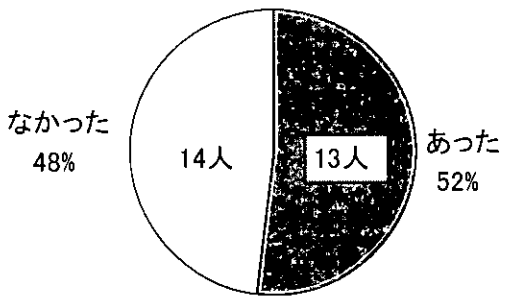
問 10)現在の仕事について、どのように感していますか



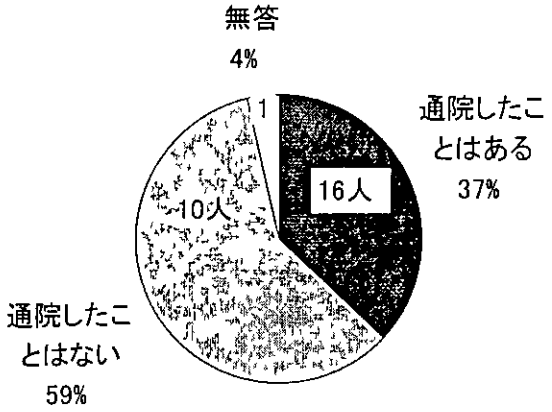
4 腰痛について

介護職員としての仕事に困るほとの腰痛経験について（問 13-1）は、半数を超える 13 名（52%）が「あった」と答えた。ただし 10 名（59%）はその腰痛て通院したことかなく（問 13-2）、22 名（82%）はその腰痛て仕事を休まなかった（問 13-3）と回答した。

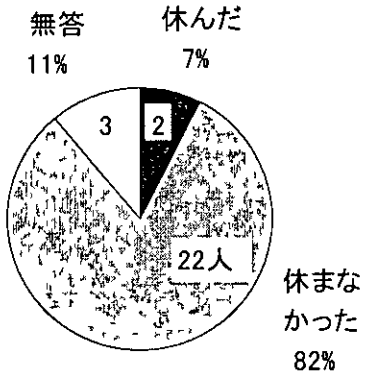
問 13-1) あなたは介護職員として働いてから
仕事に困るほどの腰痛経験がありますか



問 13-2) あなたはその腰痛で通院したことがありますか



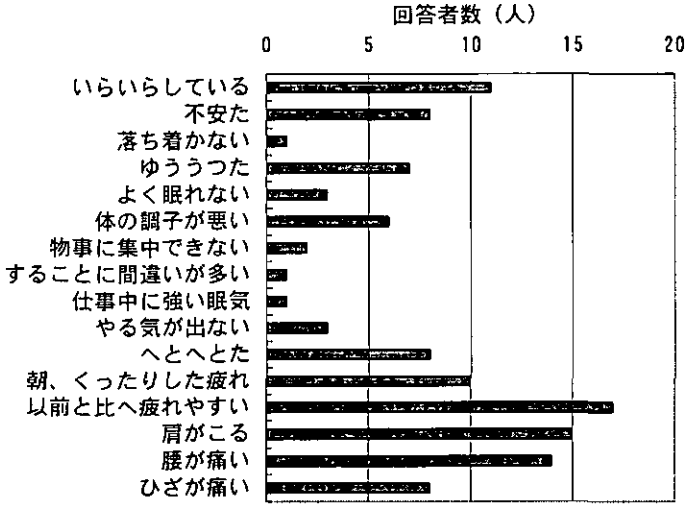
問 13-3) あなたはその腰痛で仕事を休みましたか



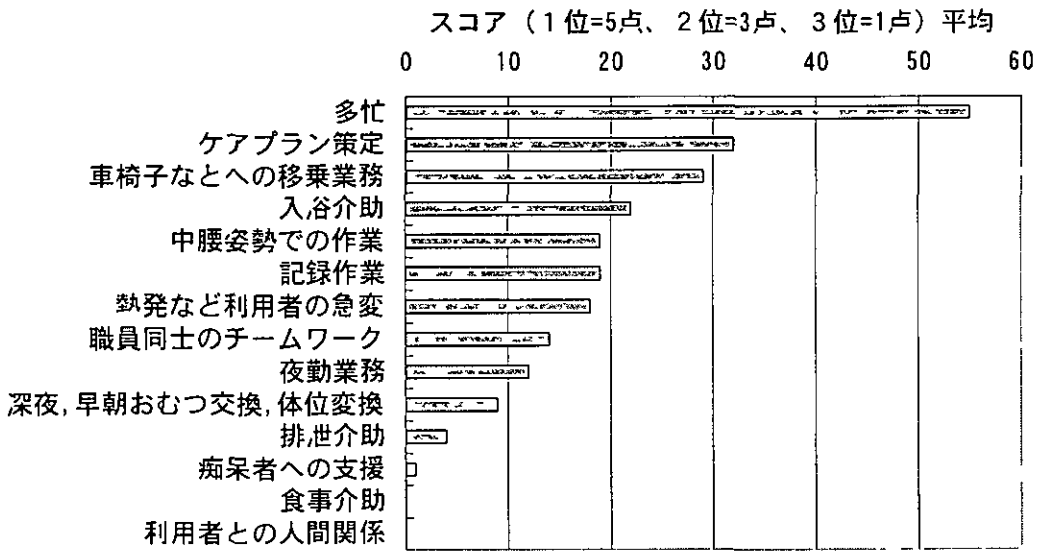
5 心身の負担

問 15 て最近の自覚症状を質問したところ、「以前と比へ疲れやすい」(17 名,63%)、「肩かこる」(15 名,56%)、「腰が痛い」(14 名,52%) の身体に関わる３項目への訴え割合が最も多かった。また次いて、「いらいらしている」(11 名,41%)、「朝、ぐったりした疲れ」(10 名,37%)、「不安た」(8 名,30%)、「へとへとた」(8 名,30%) といった精神面の訴えも見受けられた。問 16 て負担と感しる業務３つ以内を順位を付けて挙げさせたところ、「多忙」のスコアが最も高く、これを１位に挙げた者が 8 名、２位に挙げた者か５名てあった。次いて「ケアプラン策定」や「車椅子なとへの移乗」のスコアか高く、とちらも４名か１位に挙げていた。

問 15)近頃、次のような症状かありますか



問 16)次に挙げる業務のうち、特にあなたの心身の負担となることはとれてすか。３つ以内を選び順位を付けて下さい。



C－2 ［特別養護老人ホーム職員の作業負担–現場調査結果–］

1 調査施設の特徴

調査施設は、利用者の居室をはじめとする生活の場が 3 フロア（1F, 2F, 3F）に分かれており、1F は寝たきりや要介護度の高い利用者、2F は痴呆の利用者、3F は状態の安定している要介護度の低い利用者か多くなっている。

2 作業内容の実態

フロア間、勤務帯間ての作業の違いを比較するために、作業観察にもとづき、介護職員の作業を業務別に分け、それそれ要した時間の割合（%）を表 1 に示した。

3 階の日勤ては排泄介助の作業が他に比へて割合が低かった。これは 3 階に要介護度の軽い利用者が多いため、利用者か起きている日勤帯ては利用者が独力て排泄を行えるケースが多いことによると考えられる。

排泄は、日常生活動作の 1 つてあり、また利用（高齢者）にとっても負担の大きい「動作」てある。それを支援する「排泄介助（おむつ交換を含む)」は、負担の大きい作業といえ、業務内容別にみた作業時間の割合ても全体の約 2 割を占めた。そこて、フロア間ての作業状況の違いを比較するために、作業観察にもとづき、介護職員が「排泄介助」を行う時間帯の行動を図 1～3 に示した。

図は、各フロアの夜勤者の排泄介助時における行動を示したものであり、1 部屋にかけた排泄介助の時間とその行動を示した。夜勤時の行動を取り上げた理由は、日勤時と比べ、1 つの業務を集中して行う場合か多く、なおかつ対象となる利用者の人数が均等てあったからてある。

1F ては、「排泄介助（おむつ交換)」、「準備・片付」、「移動」の繰り返してあるのに対し、2F は「声かけ」、「用談」が頻繁に見られた。また、3F はおむつ交換の必要があるかどうかの確認が中心てあって、そのため、実際の 1 部屋あたりの介助時間は短かった。

「休憩」は日勤、夜勤、各フロア共に一定時間取れているが、業務計画ての所定の休憩時間以外ての手休め、休憩はほとんと見られなかった。

また 2 階の日勤ては身体清潔介助作業か他に比べて割合か高かった。これは調査日が週に 2 回ある入浴日に重なったためてあると考えられる。3 階の日勤ても「その他の業務」か高い割合を示しているか、これは、調査日に 2, 3 ヶ月に 1 度程度の特別なレクレーションが行なわれたためと考えられる。日勤に比べ、夜勤てはレクレーション等の時間がないため、「その他の業務」の割合が少ない。

表１　業務内容別にみた作業時間の割合（%）

		1F		2F		3F		1F		2F		3F	
		日勤	夜勤	日勤	夜勤	日勤	夜勤	日勤	夜勤	日勤	夜勤	日勤	夜勤
看護的業務	観察　測定	0 4	0 8	0 0	2 0	0 1	0 8	1 0	2 4	1 3	7 1	0 8	4 6
	処置	0 0	1 6	1 2	2 0	0 2	2 7						
	注射、点滴、投薬等の準備	0 6	0 0	0 1	2 6	0 0	1 1						
	薬品管理	0 0	0 0	0 0	0 0	0 1	0 0						
	医療器具　器械・材料の取り扱い	0 1	0 0	0 0	0 4	0 5	0 0						
	療養生活のインストラクション	0 0	0 0	0 0	0 2	0 0	0 0						
身体清潔介助	身体清潔を保つための介助	1 9	1 7	12 9	4 0	4 9	2 1	1 9	1 7	12 9	4 0	4 9	2 1
食事（水分）介助	食事の介助	9 7	9 9	10 2	8 7	15 8	13 1	18 0	19 1	15 8	11 2	21 1	14 0
	お湯、お茶、おやつ等の摂取介助	8 4	9 2	5 7	2 5	5 3	0 9						
排泄介助	排泄（物）の世話、処置	13 7	15 9	20 6	18 8	8 3	19 1	13 7	15 9	20 6	18 8	8 3	19 1
身の回りの世話	身の回りの世話	9 7	9 8	4 2	7 0	8 7	4 8	16 8	13 2	14 5	13 1	14 3	8 8
	患者の体動、移動、移送の介助	7 2	3 4	10 3	6 1	5 6	4 0						
その他の業務	清掃、整理、整頓	6 5	7 8	4 2	6 2	2 8	3 0	23 2	17 5	20 8	15 0	33 1	21 4
	レクレーションの援助	0 5	0 0	0 7	0 4	9 7	0 0						
	申し送り	1 0	0 3	0 0	0 9	4 6	2 8						
	記録　情報整理	9 0	4 6	5 4	2 3	8 4	9 3						
	職員間の連絡・用談	3 8	3 1	4 9	2 7	4 3	1 5						
	会議　ミーティング	0 4	0 0	3 3	0 7	0 0	0 7						
	雑作業	0 4	0 5	0 4	0 7	2 0	0 3						
	本人の身支度・手洗い	1 8	1 2	2 0	1 3	1 5	3 8						
移動	移動	6 8	6 4	2 8	3 5	5 1	7 1	6 8	6 4	2 8	3 5	5 1	7 1
休憩	休憩等	10 8	21 1	10 8	24 3	10 6	21 9	10 8	21 1	10 8	24 3	10 6	21 9
業務外	調査関係	7 6	2 4	0 5	2 7	2 0	0 9	8 0	2 9	0 7	3 5	2 2	0 9
	待機	0 0	0 1	0 1	0 0	0 2	0 0						
	不明	0 4	0 4	0 2	0 8	0 0	0 0						

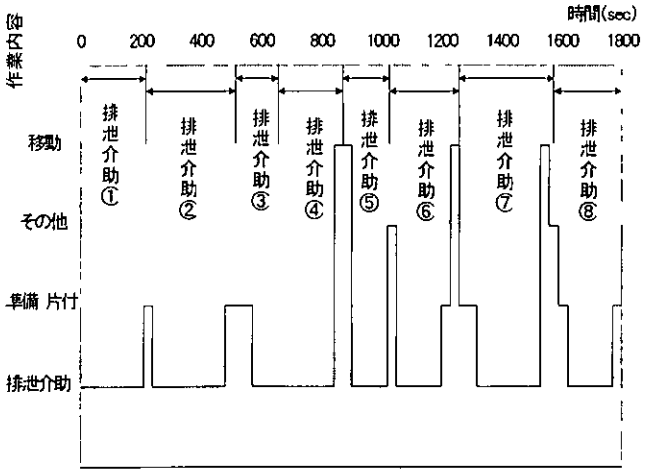


図 1　1F 夜勤者の排泄介助時の行動

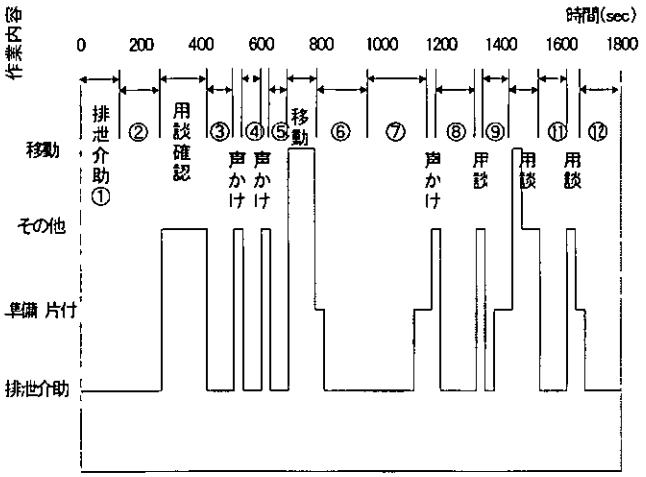


図 2　2F 夜勤者の排泄介助時の行動

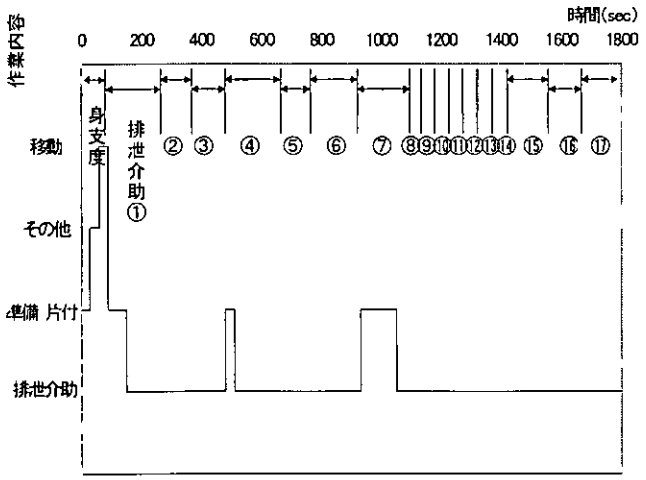


図 3　3F 夜勤者の排泄介助時の行動

注)「準備　片付」は「排泄介助」の準備・片付けてある

「その他」は起きていた利用者への声かけや同僚との確認のための用談等てある

○数字は、「排泄介助」を行った部屋数を表している。

3 作業姿勢

フロア間、勤務帯間ての作業姿勢をみるために、作業観察にもとつき、介護職員の作業姿勢の割合(%)を図4～9に示した。

立位作業が全体の半分を占めており、また歩行・運搬を併せると全体の7割程度になっている。一方、椅座位の作業はほとんと記録作業のときのものてあった。これらから、介護業務は立ち仕事てあると言うことか出来ると考えられる。

全9件(データか正確に記録てきなかった2例を除く)の1秒ことの上体傾斜角を、20°未満のClassⅠ、20°以上45°未満のClassⅡ、45°以上のClassⅢの3つのClassに振り分け、それぞれのクラスことの分布割合を表2に示し、また作業内容に対する上体傾斜角と活動量との変化の様子を、一事例として夜勤ての朝方のおむつ交換から朝食準備までの間について図10に示した。

おむつ交換を中心に上体傾斜角が深い姿勢か頻発しており、ClassⅡのやや深い姿勢とClassⅢの深い姿勢が多い。このように介護業務が姿勢による腰部負担の大きい作業の多いことが、上体傾斜角の大きさから推定出来ると考えられる。

4 業務内ての会話発生の状況

フロア間ての介護職員のコミュニケーション(同僚、利用者)をみるために、フロア内ての会話発生の状況を図11～13に示した。

1階と3階はスタッフとの会話か1番多いが、2階は利用者との会話の割合か1番多い。2Fの利用者に痴呆が多いことか原因といえる。

5 自覚症しらべ

各フロア毎の自覚症しらべの平均値の変化を、図14～16に示した。夜勤については2階と3階ては朝方にかけて疲労が蓄積していると考えられる。また日勤ても1階と2階において徐々に疲労か蓄積していると考えられる。3階の日勤てもスコアのレベルか高いか、これが作業によるものなのか個人差に拠るのかは検討の余地がある。

表２　上体傾斜角の分布割合

対象者（フロア）	勤務帯	観察時間（分）	各上体傾斜クラスの分布割合（%）		
			クラスⅠ	クラスⅡ	クラスⅢ
1F	日勤	539	60 9	20 9	18 2
1F	夜勤	1454	29 4	30 7	39 9
2F	日勤	441	29 4	40 9	29 7
2F	夜勤	1693	53 4	26 5	20 2
3F	日勤	1030	48 9	37 1	14 0
3F	夜勤	876	25 8	41 2	32 9
家事援助（比較データ）	ホームケアサービス	118	43 0	28 2	28 8
身体援助（比較データ）	ホームケアサービス	114	28 0	33 7	38 2

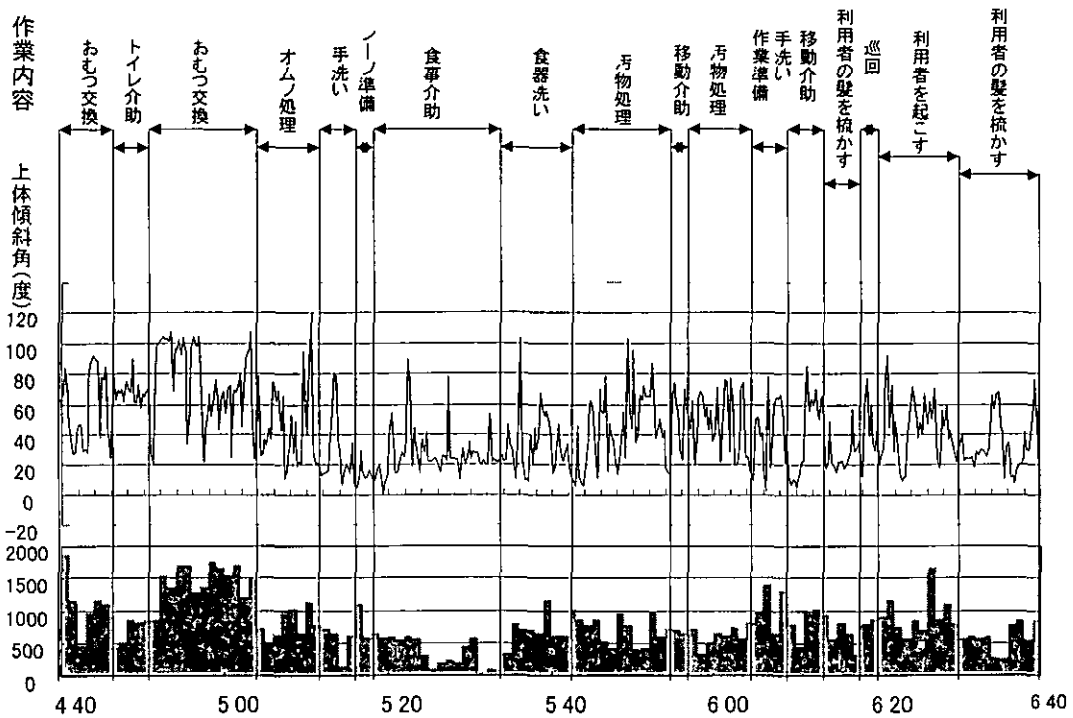


図 10　作業内容に対する上体傾斜角と活動量の変化の例

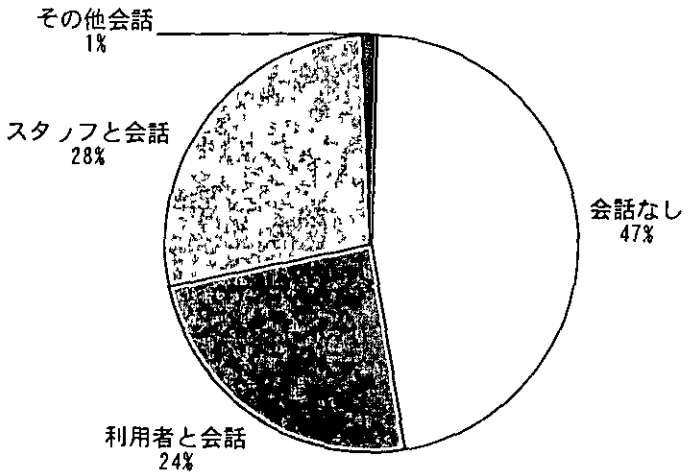


図11　１Ｆにおける会話の様子（全体）
（のべスタッフ人数１４名　観察回数６９８回）

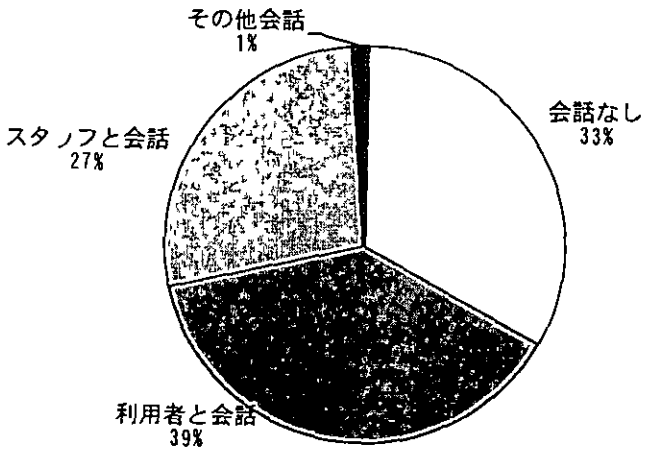


図12　２Ｆにおける会話の様子（全体）
（のべスタッフ人数１３名　観察回数５１６回）

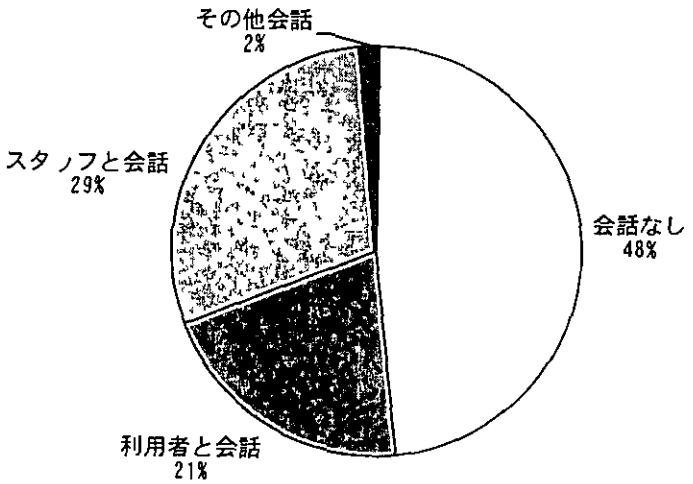


図13　３Ｆにおける会話の様子（全体）
（のべスタッフ人数１１名　観察回数４６３回）

D 考察

今回の特別養護老人ホーム（以降、特養と略す）を対象とした調査研究では、作業負担の視点から介護業務の特性を明らかにしたか、第１に、特養ての働き方に特徴がみられる。アンケート調査なとによくあらわれていたか、業務中の作業負担として、「多忙感」をあげる職員が多かった点が注目された。当然、有効な多忙対策が緊急に必要てある。この点と関連するが、作業方法の見直しか望まれる。特養ては、高齢者の生活援助が主たる業務てあるが、手をかけたい援助は山ほどあるに違いない。高齢者のＱＯＬの向上と自立を促しなから、かつ職員の作業負担か過大にならず、同時に働きがいの向上かすすむような作業方法を検討し、実現することが望まれる。また、介護業務ては高齢者の生活ペースに合わせた働き方と、高齢者かつくりたす物理的な空間（一般的に、職員よりは低めとなる）に適応しなければならないのは、半ばやむを得ないことてある。また、高齢者援助の過程て、高齢者をかかえトランスファーすることが頻繁に起こる。しかし、介護業務の遂行によって起こるこれらの一連のことを職員の側からみれば、人間工学的な条件は大変に厳しいとみなければならない。高齢者ならひに職員の双方が、満足てきる人間工学的な条件整備をすることが課題といえる。そのための改善手法を編み出すことが必要てある。さらに、たとえば夏の風呂場て長時間にわたって入浴介助を実践することは、職員にとっては非常にハードな作業場面となる。また、おむつ交換や排泄介助を行うことも、臭気という作業環境からみれば、職員にとって厳しい作業場面の一つてある。何気ない生活の一場面も、職員にとっての作業環境とみれば、改善が必要となる。

最後に、特養ては、24時間にわたり高齢者の生活を支援することや安全を見守るために、職員の勤務も 24 時間全体をカバーする必要かある。介護職員の作業負担を考える上て、労働時間や勤務制も組み方にも十分な配慮が必要てある。同時に、負担軽減策として作業中の休憩や、夜勤中の仮眠挿入などについても検討をすすめることが望まれる。

第２に、職員か働きがいを持つことは、介護業務を継続する上て重要てある。アンケート調査の結果をみても、「やりがいのある仕事」、「人間的な成長が得られる仕事」、「誇りの持てる仕事」などへの応答率は非常に高く、職員が特養ての業務に働きがいを持っていることは明らかてある。その一方て、「体力か必要な仕事」、「精神的なストレスが大きい」、「時間に追われる」、「責任か重い」なと、業務の負担を示す項目への応答率も高いことも特徴てある。特養ての介護業務は、「働きがい」と「作業負担」の両面を持っているといえる

第３に、特養て働くことに要求される能力と、実際に遂行する業務との間のマッチング（適合性）に、「とまとい」を持つ職員か一定数に達していることか注目される。「(介護の）仕事への適性」、「自分の能力を生かせる仕事」、「社会的な評価が高い」なとの項目に肯定する応答率は 30％強にととまり、「とちらともいえない」に 60％強の職員か回答した。

これらのことから、特養ての介護業務の作業負担要因は多面にわたっていることか特徴といえる。こうした実態を改善していくことは、職員のやる気をさらに引き出す上て重要なことてあるが、あまり思いつき的な提案をすることや拙速な介入を行うことは、かえって効果が薄いものと思われる。マネジメントの力を発揮しながら、現場参加を促すような腰を据えた取り組みが望まれるところてある。

E 結論

介護労働に関する快適度アセスメント

平成14年度に実施した「ホームヘルパーの仕事と負担対策」ならひに平成15年度の「特別養護老人ホームにおける仕事と人間工学的対策」の調査研究の成果ならひに経験から、簡易「介護労働に関する快適度アセスメント」のために、つぎの１２項目を推奨する。

① 介護労働の遂行に当たり、過大な重量負荷や不自然な姿勢て力が発揮されることがないように、機械的な補助手段の活用や高さ調節による姿勢調整なとの人間工学的な対策が講しられている（３点満点）

② サービス利用者（高齢者）の移乗に当たっては、能力の高い助力装置なとが利用されているか、そうした機器が使えない場合には、複数人の共同作業て行うことが作業標準になっている（３点満点）

③ サービス利用者（高齢者）の移乗に当たり、人間のからたの仕組みに配慮した合理的な作業姿勢てサポートてきるように、十分な訓練が行われている（５点満点）

④ 入浴介助やおむつ交換なとに当たり、同一内容の作業や不自然な姿勢ての作業を長時間継続することのないように、１時間くらいを目安に休憩時間の挿入や、作業交代が行われている（３点満点）

⑤ サービス利用者（高齢者）に急変か起こった場合なと、緊急事態への対応法について事前に十分な検討を行うとともに、実際の緊急時に適切な行動が取れるように普段から訓練されている（３点満点）

⑥ サービス利用者（高齢者）の特性（痴呆症状の有無や要介護度、性格ほか）にあわせて、ベテランと若年者の組み合わせをするなと、職員配置が適正に行われている（３点満点）

⑦ 夏場の入浴介助なと、厳しい作業環境のもとての作業ては、通常より休憩回数を増やすことや一連続作業時間を通常より短く設定するなとの措置かとられている（３点満点）

⑧ 汚物などの臭いが周囲に拡散しないような対応法が検討され、職員に指示されている（３点満点）

⑨ 介護によって起こる感染症に関する情報や対策が十分に講しられている（３点満点）

⑩ 介護労働に関するスキルアップならひに若年者への技術伝承の機会が十分にある（３点満点）

⑪ 夜勤中に強い眠気を有することや、不眠など、夜勤への不適応を訴える職員を、適切にサポートてきている（３点満点）

⑫ 介護労働に関する不満やサービス利用者（高齢者）との人間関係などて生しるストレスなどについて、労働者が相談てきる場や機会かある（５点満点）

総合４０点満点

３３ー４０点　　十分快適

２６ー３２点　　まあまあ快適

２４点以下　　快適とはいえない

＜添付資料　調査用紙＞

介護職員の業務と作業負担軽減対策についての調査

2003年9月

財団法人労働科学研究所

調査協力のお願い

生活サービス室の業務と作業負担の実態について働く皆さんから直接意見をお聞きすることにしました。日々多忙なおりに恐縮ですが、本調査趣旨をご高配の上、ご協力くたさるようお願い申しあげます。

皆さんからの回答は数字に置き換えて統計処理します。結果は「○○と答えた方か何パーセントいます」という形てまとめますので、個人の回答が特定されることはありません。ありのままをお答えください。なお、記入が終わりましたら、封筒に入れ、封をして係りの方へご提出下さい。

Ⅰ　あなた自身のこと

1)　あなたの性別は　　1　女性　　2　男性

2)　あなたの年齢は　　（　　）歳

3)　あなたは、現在の勤務先に何年働いていますか。

1　1ヶ月未満　　2　1ヶ月～半年未満　　3　半年～1年未満　　4　1年～2年未満

5　2年～5年未満　　6　5年～10年未満　　7　10年以上　（　　年）

Ⅱ　あなたの仕事と勤務・雇用などについて

4)所属　　1　第1生活サービス、2　第2生活サービス、3　第3生活サービス、

4　その他（　　）

5)職種　　1　寮母・父、2　介助員、　3　その他（　　）

6)資格（重複回答可）　1　介護福祉士　2　社会福祉士　3　ケアマネジャー

4　その他（　　）

7)勤務形態　1　常勤、　2　非常勤　3　その他（　　）

8)先月1ヵ月間の夜勤回数

1　なかった　2　1ー3回、3　4ー5回、4　6ー7回、5　8ー9回、6　10回以上

9)-1　夜勤中に仮眠をとることはてきますか。

1　とれない、2　夜勤の半分くらいはとれる、3　夜勤のたひにだいたいとれる

9)-2　仮眠がとれるときには、とのくらい眠れますか。

1　30分くらい、2　1時間くらい、3　2時間くらい、4　2時間以上（約　　時間）

Ⅲ　あなたの仕事について

10)　あなたは現在の仕事について、とのように感していますか。質問ごとに3つのなかからあてはまるものに○をつけてください。

1　やりかいのある仕事てある　　1　はい　2　いいえ　3　とちらともいえない

2　人間的な成長が得られる仕事てある　　1　はい　2　いいえ　3　とちらともいえない

3	自分は仕事への適性がある	1	はい	2	いいえ	3	とちらともいえない
4	仕事仲間との関係はうまくいっている	1	はい	2	いいえ	3	どちらともいえない
5	自分の能力が生かせる仕事てある	1	はい	2	いいえ	3	とちらともいえない
6	知識と技術か必要な仕事てある	1	はい	2	いいえ	3	とちらともいえない
7	体力が必要な仕事てある	1	はい	2	いいえ	3	とちらともいえない
8	精神的なストレスの大きな仕事てある	1	はい	2	いいえ	3	とちらともいえない
9	支援が得られない孤独な仕事てある	1	はい	2	いいえ	3	とちらともいえない
10	時間に追われるような仕事てある	1	はい	2	いいえ	3	とちらともいえない
11	責任の重い仕事てある	1	はい	2	いいえ	3	どちらともいえない
12	社会的な評価か高い仕事てある	1	はい	2	いいえ	3	どちらともいえない
13	誇りの持てる仕事てある	1	はい	2	いいえ	3	とちらともいえない

11) 利用者や家族なとから医療行為を求められることかありますか。

1 ない　　2 過去はあったか今はない

3 ある→誰から言われましたか。またそれはとんなことてすか。

【記入欄】

Ⅳ あなたの健康状態

12) あなたの現在の状態についておききします。質問ごとに１～５のうち一番近い番号に○をつけてください。

健康状態	不健康	1	2	3	4	5	健康
仕事の満足度	不満足	1	2	3	4	5	満足
疲労状態	へとへと	1	2	3	4	5	元気いっぱい
睡眠の充足度	不足	1	2	3	4	5	十分
仕事と家庭の両立	不満	1	2	3	4	5	満足

13) 腰痛についてお聞きします。

1 あなたは介護職員として働いてから仕事に困るほとの腰痛経験がありますか。

1 なかった　　2 あった

2 あなたはその腰痛て通院したことかありますか。

1 通院したことはない　　2 通院したことはある

3 あなたはその腰痛て仕事を休みましたか。

1 休まなかった　　2 休んた

4 あなたの仕事のうち、腰に負担のかかる作業は何てすか。主要なものを２つあげてください。

1

2

14) 感染症についてお聞きします。

1 利用者の病気かあなたに感染したことかありますか。

1 ない　2 わからない　3 ある→病名は何てすか(複数回答可)

1 疥癬　2 結核　3 ＭＲＳＡ（感染症）　4 緑膿菌（感染症）

5 肝炎（B型、C型）　6 カンジダ（真菌症，水虫など）

7 インフルエンザや風邪なと　8 その他（　　）

→なぜ、利用者からの感染とわかりましたか。

1 自分の定期健康診断て　2 自分て気がついて医者て受診して

3 第三者や家族に指摘され受診して　4 利用者の診断結果を通して

5 その他（　　）

2 あなたがつとめる事業所ては、感染症対策を具体的に講していますか。

1 講していない

2 講している→とんな対策てすか(例　手袋の着用)。具体的にお書きくたさい。

（　　）

3 あなたはこれまてに、感染症についての研修や教育を受けたことがありますか。

1 ない　2 ある　3 わからない

→「ある」とお答えの方、何の研修て受けましたか

4 あなたは利用者の感染症の説明を受けていますか。

1 ない　2 受けていることもある　3 必ず受けている

15) あなたは近頃、つぎのような症状がありますか。あてはまるものすべてに○をつけてください

1 いらいらしている　2 不安だ

3 落ち着かない　4 ゆううつた

5 よく眠れない　6 体の調子か悪い

7 物事に集中てきない　8 することに間違いが多い

9 仕事中、強い眠気に襲われる　１０ やる気が出ない

１１ へとへとだ（運動後を除く）　１２ 朝起きた時、ぐったりした疲れを感しる

１３ 以前と比へて疲れやすい　１４ 肩がこる

１５ 腰が痛い　１６ ひざが痛い

16) 次にあげる業務のうち、とくにあなたの心身の負担となることはどれですか。以下の中から順位をつけて３つ以内を選び、下のらんに番号を記入下さい。

1 入浴介助、　2 車いすなとへの移乗業務、　3 排泄介助、

4 食事介助、　5 熱発など利用者の急変、　6 痴呆者への支援、

7 利用者との人間関係　8 職員同士のチームワーク　9 夜勤業務、

１０ 中腰姿勢ての作業　１１ 多忙　１２ 深夜・早朝帯のおむつ交換や体位交換、

１３ 記録作業　１４ ケアプランの策定業務

１５ その他（　　）

第１位（　　）、第２位（　　）、第３位（　　）